

本編に入る前に

口語訳

《一》《他人の》私できえ、《あなたが》たった一人で辛い旅に出立すると思いと心配なので、《ましてあなたのご両親は》さぞかし《あなたのことを》心配なさっていることでしょうと、涙にむせびながら、まるで自分の子を思うかのように言ったので、「わがははの……私の母が、私の着物の袖を手にとってなでながら、私ゆえに《別れを悲しんで》泣いてくれた心持ちを忘れることができない。」と《いう『万葉集』の歌を》吟唱して、ますます両親のおいになる故郷が恋しく思われ、どのような前世からの因縁によって、このように親が子を思う真心で《血縁のない私のことを》心配して下さるのであるかと、涙を押さえて《詠んだ歌》、

いかなれば……どういいうわけで、老いの涙が私の袖にかかるように、《あなたは》このような深いお情けを私にかけて下さるのでしよう。そのお心をどうして《私は》忘れることができまじょうか、忘れることができません。

◎筆者の菅江真澄（江戸後期の旅行家・民俗学者）が知人の老母と交わした別れの挨拶。

《二》あなたのような重宝な人はいらっしやらないから、いつまでも《私の家にいてほしい》と思うけれども、《他の人たちは》誰もかれも家に代々仕えてきた者として、暇を出すことができない者たちなので、なにはともあれ《あなたが》どこへでも出て行って下さい。

◎奉公人の女の正体が妖怪変化であることを知った女主人が、その奉公人に言った言葉。

第1日

「なむ」の識別

解答

基礎演習

- ① Ⅱ a ② Ⅱ b ③ Ⅲ d ④ Ⅱ c ⑤ Ⅱ a ⑥ Ⅱ d

発展演習

- 1 ① Ⅱ オ ② Ⅱ イ ③ Ⅱ イ

- 2 (a) ①

(b) 「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は意志の助動詞「む」の終止形。

解説

基礎演習

「なむ」についてはまず、直前の活用形等を確認することから始める。

- ①の直前「のほり」は、ラ行四段活用動詞「のほる」の連用形。
 - ②の直前「なりゆく」は、カ行四段活用動詞「なりゆく」の連体形。
 - ③の直前「待た」は、タ行四段活用動詞「待つ」の未然形。
 - ④の直前「死」は名詞ではなく、正しく品詞に分けると「死な」「む」となるもの。そして、「死な」は、ナ行変格活用動詞の未然形、「む」は推量の助動詞(ここの細かい意味は「意志」)である。
 - ⑤の直前「あり」は、ラ行変格活用動詞「あり」の連用形。
 - ⑥の直前「さら」は、打消の助動詞「ず」の未然形である。
- 以上の結果を識別パターンにあてはめていけば、解答が導ける。ところで、【手順・解説】⑤で取り上げた形容詞の連用形に付いた「なむ」について、用例を上げて補足しておく。

- 1 「かかる御使ひの、よもぎふの露分け入りたまふにつけても、いと

た場合、未然形と連用形が同じかたちなので、識別パターンのA他への願望(この問題では「あつらえの意」となっている)の終助詞と、B強意の助動詞+推量の助動詞との区別ができない。

本問では、未然形ならア、連用形ならオであるが、やむをえず、前後の文脈をたよりに判断することになる。「その里までは遠い。(ア日は暮れてほしい・オ日は暮れてしまおう)」、今夜はここで夜を明かしなさい」という場面なので、アでは意味をなさず、オが正解となる。

- 2 この問題も、直前の語を調べることから始める。

- ①の直前「ものし」は、サ行変格活用動詞「ものす」の連用形。
- ②の直前「する」は、サ行変格活用動詞「す」の連体形。
- ③の直前「なき」は、形容詞ク活用「なし」の連体形。
- ④の直前「む」は、推量の助動詞「む」の連体形。

以上の考察から、用法の異なるものは①であることが明らかになる。あとは理由説明であるが、識別パターンを思い出せばこれも容易であらう。

解答では助動詞の意味を細かく答えておいたが、「な」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞と答えることもできる(ただし、大学側の採点基準が不明なので、これでも完全に正解と認められるかどうか断言できない)。

念のため、②・③・④の「なむ」はすべて係助詞である。

口語訳

基礎演習

- (1) 母の北の方は、同じ火葬の煙となって上りたい(Ⅱいっしょに死にたい)と泣き恋しがりなさって……
- (2) ものの情趣も理解しないようになっていくのは、嘆かわしいことである。

はづかしうなむ。(源氏)

(このような帝のお使いが、よもぎの露を分けてお尋ねくださるにつけても、はずかしゅうございます。)

- 2 もし賢女あらばそれもものうとく、すさまじかりなむ。(徒然)
- (もし賢女がいたとしたらそれもしたしみがなく、興奮的なものだろう。)

この二つの例は、いずれも連用形に接続していることは明らかだから、パターンにあてはめればBの「強意の助動詞+推量の助動詞」になるはずだが、解説で触れたように「はづかしう」(これはもちろん連用形「はづかしう」のウ音便)など本活用の方に付いた「なむ」は係助詞にしなければならぬのである(本活用には助動詞は接続しない)。この例のように文末にきた場合特にまぎらわしいが、ここは結びに「はべる」などが省略されたものと考えればよい。

「すさまじかり」など補助活用が付いた方は、パターンどおり助動詞である。

発展演習

1 問題本文が長文なのでとまどう人がいるかもしれないが、考え方は基礎演習と同様なので、まず直前の語を調べることから始める。

- ①の直前「暮れ」は、ラ行下二段活用動詞「暮る」の未然形または連用形。

- ②「と」は、格助詞(引用を受ける用法)。

- ③「と」も、同じく格助詞。

この段階で、②・③はイの「強調の意の係助詞」に確定する。ちなみに、②「なむ」の結びは、直後の「語りける」の「ける」(過去の助動詞「けり」の連体形)、③「なむ」の結びは省略されていて、たとえば「聞きける」などの「ける」と考えればよい。

さて、①に戻るが、上二段や下二段に活用する語に「なむ」が接続し

- (3) 小倉山の峰の紅葉よ、もしお前に心があるならば、もう一度天皇の行幸があるまで散らずに待っていてほしいものだ。

- (4) 私が願うことは、桜の花の下で、春死にたいということだ。(あのお釈迦様が入滅された)二月の十五日、満月のころに。

- (5) ああうらやましい、どうして習わなかったのだろう、と言っておくだけがよからう。

- (6) 今年、初めて春を知って花をつけた桜よ。(咲くことだけを知って)散るということは覚えないでほしいものだ。

発展演習

1 またある日、隣に住む男が、妻と言い争いだして、とうとうその妻を追出した。妻は泣く泣く蘭齋らんさいの方に行って来たのに対し、蘭齋翁が言ったことには、「お前の行こうとする」その里までは少し遠い、きつと日が暮れてしまおう、今宵はここで夜を明かしなさい」と引きとめた。夜が更けるにつれて寒くなってくると、「わが家は貧しいので、自分用の他に寝具なども持っていない。かまわずここに入ってきなさい」と言っ

て、(翁は)自分の寝具の中へ抱き入れて寝かせて、明くる日早く帰してやった。(その妻は)「その夜、まったく幼いとき祖父などに抱かれて

いるような気持ちがありました」と、語ったということである。

- 2 (兼家が)「ここにとでもいたいけれど、何をすることも不都合だろうから、あちらに帰ろうと思う。薄情だとお思いなさるな。急に、いくらも生きていられないような気がするの、実につらい。ああ、私が死んだとしても思い出してくださるようなことが一つもないのが、本当に悲しい」と言って、泣くのをみると、わけも分からなくなって、私もまたひどく泣けてくると、「お泣きななさるな、よけいに苦しくなる。この世で何よりつらいことは、思いもかけないときに、このような別れをする」とであるよ。(私が死んだら)あなたはどうかなさるだろう。……」